

令和 8 年 9 月 8 日
建設局
(公財) 東京都公園協会

Park × Art 日比谷から始まる新しい公園のかたち 「Hibiya Art Park2026 Timeless Phenomena-確かにありそうなもの-」

－2026年11月13日（金）から11月29日（日）まで
日比谷公園「花と光のムーブメント」開催！－

東京都は、四季を通じた花と光の演出によって公園の新しい楽しみ方をお届けする「花と光のムーブメント」を実施しています。日比谷公園では、昨年に引き続き、2026年も花と光にアートを組み合わせた大規模アートインスタレーションを通して、公園の新たな一面をお届けします。

また、今回は、2026年10月開幕のARTE TOKYOのハイライトプログラムの一環として実施します。「Timeless Phenomena -確かにありそうなもの-」をテーマに、3名のアーティストによる作品を、花と光と共にお届けします。

アートにご興味のある方も、そうでない方も、普段とは異なる装いの日比谷公園に、ぜひ、お越しください。



「Timeless Phenomena-確かにありそうなもの-」特設サイト

<https://www.tokyo-park.or.jp/special/flowerandlight/hibiya2026autumn/index.html>

会期：2026年11月13日（金）～11月29日（日）

会場：日比谷公園（千代田区日比谷公園）

時間：9:00～21:00

入場：無料・予約不要



「Timeless Phenomena
-確かにありそうなもの-」
特設サイト

〔問い合わせ先〕

建設局公園緑地部 公園建設課

橋本・土居 電話 03-5320-5380（内線 41-310）

（公財）東京都公園協会 事業開発課

中山・内山 電話 03-3232-3028

■全体概要

■内 容

本企画は、永山祐子氏をディレクターとして迎え、キュレトリアルコラボレーターとして丹原健翔氏が参画します。「Timeless Phenomena-確かにありそうなもの-」をテーマに、栗林隆氏、佐々木類氏、横手太紀氏の3名のアーティストが本企画のための作品を展開します（アーティスト等紹介については、別紙参照）。

120年以上にわたり、東京の中心で都市の変化とともに歩んできた日比谷公園。近代化が進む都市の時間と隣り合いながら、木々や草花、生き物、光や風といった自然の営みによって、この場所ならではの時を刻み続けてきました。

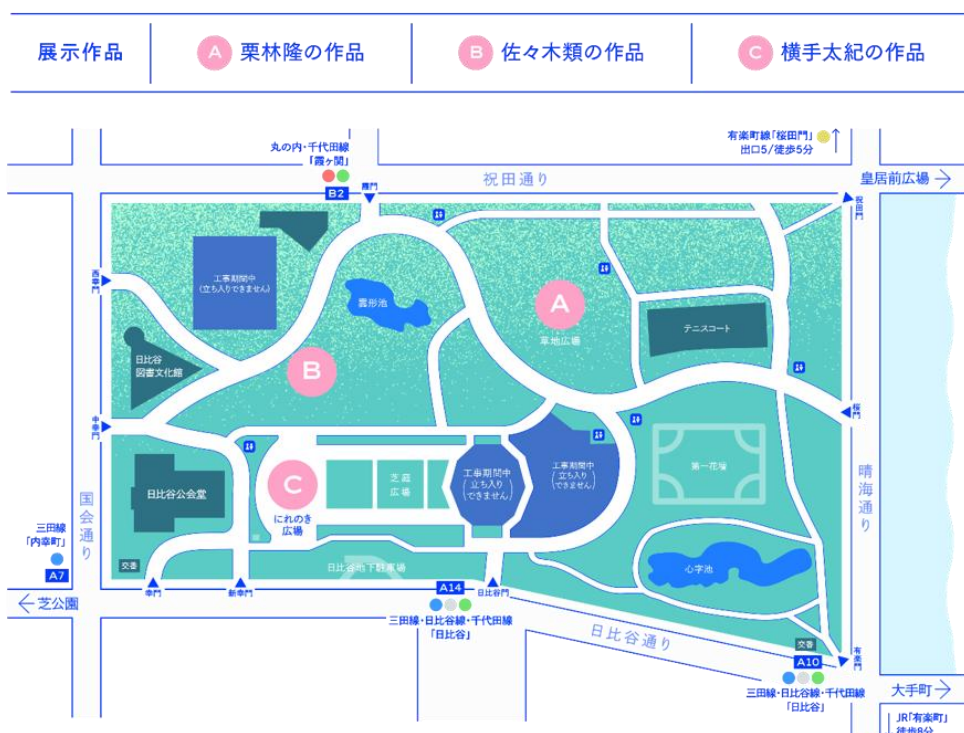
本企画では、アーティストの作品を通して、私たちが日々の暮らしの中で意識している「時計の時間」から少し離れ、自然の移ろいや身体で感じる時間に目を向けます。花は会場を彩るだけではなく、人や植物、虫や鳥など、公園内に存在する様々なものをつなぐ存在として登場します。本企画を通じて、日比谷公園の風景を、新たな視点でお楽しみください。

※ 詳細は、今後、特設サイトにてお知らせします。

<https://www.tokyo-park.or.jp/special/flowerandlight/hibiya2026autumn/index.html>

■会場

以下のエリアにて実施いたします。



■「花と光のムーブメント」とは

東京都では、四季を通じた花と光の演出によって公園の新たな楽しみ方をお届けする「花と光のムーブメント」を実施しています。日本初の近代的洋風公園として、1903年の開園以来、新しい文化を発信してきた日比谷公園。ここでは今年も、花と光に「アート」の要素を取り入れたプログラムを展開します。開かれた公共空間ならではの表現を通して、「一人ひとりにとって価値のある場所」としての日比谷公園の新しい公園のかたちを、ぜひご体感ください。

「花と光のムーブメント」 特設サイト

<https://www.tokyo-park.or.jp/special/flowerandlight/index.html>



「花と光のムーブメント」
特設サイト

【令和8年度「花と光のムーブメント」について】

舎人公園	2026年4月10日（金）～4月26日（日）	※終了しました
葛西臨海公園	2026年7月31日（金）～8月16日（日）	※終了しました
小金井公園	2026年10月23日（金）～11月8日（日）	
日比谷公園	2026年11月13日（金）～11月29日（日）	
狭山公園	2026年11月14日（土）・15日（日）・21日（土）～23日（月・祝）	
木場公園	2027年2月26日（金）～3月7日（日）	

■注意事項

気象災害等により、イベントや一部サービスを中止・休止・変更することがあります。ご来園前に「花と光のムーブメント」特設サイトにて最新情報をご確認ください。

■その他

「花と光のムーブメント」は今秋開催される「ARTE TOKYO」のハイライトプログラムです。

「ARTE TOKYO」特設サイト

<https://artetokyo.jp/ja/>



「ARTE TOKYO」特設サイト

■「花と光のムーブメント5周年スタンプラリー」

「花と光のムーブメント」5周年を記念し、「花と光のムーブメント5周年スタンプラリー」を開催しています。各公園のイベント開催期間中に、対象となる6公園のうち3公園でスタンプを集めた方へ、ノベルティ（オリジナル手ぬぐい）をプレゼントします。ぜひご参加ください。



▲オリジナル手ぬぐいデザイン（イメージ）

※スタンプ取得は、各対象公園の「花と光のムーブメント」開催期間中に限ります。

※ノベルティは、小金井公園、日比谷公園、狭山公園、木場公園の各イベント開催期間中に、各公園内の会場で配布します。

※「花と光のムーブメント5周年スタンプラリー」の詳細につきましては、各実施公園の「花と光のムーブメント」特設サイト、もしくはスタンプラリーアプリ「furari」をご確認ください。

「furari」ダウンロードはこちら



iOS

<https://apps.apple.com/jp/app/furari/id1460353925>



Android

https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.co.s_one.furari&hl=ja

日比谷公園について

[所在地] 千代田区日比谷公園

[交通] ●東京メトロ丸ノ内線・千代田線「霞ヶ関駅」下車（B2）出口すぐ

●東京メトロ日比谷線・千代田線・都営地下鉄三田線「日比谷駅」下車
（A10・A14）出口すぐ

●東京メトロ有楽町線「桜田門駅」下車（出口5）徒歩5分

●JR「有楽町駅」下車日比谷口出口 徒歩8分

[問い合わせ先] 日比谷公園サービスセンター

〒100-0012 千代田区日比谷公園1-6

TEL 03-3501-6428（開所時間8:30～17:30）

[「Hibiya Art Park 2026」特設サイト]

<https://www.tokyo-park.or.jp/special/flowerandlight/hibiya2026autumn/index.html>



特設サイト

[「Hibiya Art Park 2026」Instagram]

https://www.instagram.com/hibiya_park_art/



公式Instagram

[日比谷公園公式HP]

<https://www.tokyo-park.or.jp/park/hibiya/>



日比谷公園公式HP

[都立日比谷公園（Hibiya Park, Tokyo）園長の採れたて情報]

@ParksHibiya <https://x.com/ParksHibiya>



都立日比谷公園（Hibiya Park, Tokyo）園長の
採れたて情報X

■■出展アーティスト（五十音順、敬称略）

栗林 隆



1968年生まれ、長崎県出身。1990年代初頭よりドイツに滞在し、以後一貫して「境界」を主題に、ドローイング、インスタレーション、映像など多様なメディアを用いて制作を行ってきた。東西分断後のドイツでの経験を背景に、自然と人間、可視と不可視、陸と水、内と外といった複数の境界面に着目し、鑑賞者の身体感覚を喚起する作品を国内外で発表している。近年は日本とインドネシアを往復しながら活動し、土地の歴史や環境、エネルギーをめぐる主題を扱うプロジェクトを展開。イスラミックアート・ビエンナーレ（ジッダ サウジアラビア 2025）、個展「Roots」（神奈川県立近代美術館 葉山 2024）、六本木アートナイト（六本木ヒルズ 2023）、ドクメンタ15（カッセル ドイツ 2022）、瀬戸内国際芸術祭（香川県 伊吹島 2019）、「Enfance／こども時代」展（パレ・ド・トーキョー パリ 2018）、個展「Water>|<Wasser」（十和田市現代美術館 2012）、「ネイチャー・センス展」（森美術館 2010）など多数。近作では《元気炉》シリーズや《Tanker Project》を通して、自然環境と社会構造の関係を批評的かつ詩的に提示している。



栗林隆 《元気炉一六号基 大谷》

佐々木類



1984年高知県生まれ。2006年武蔵野美術大学卒業、2010年ロードアイランドスクールオブデザイン大学院修士課程修了。身近にある自然や生活環境にインスピレーションを得ながら、主に保存や記録が可能な素材であるガラスを用い、自分が存在する場所で知覚した「微かな懐かしさ」のありようを探求している。北欧やアメリカを中心に滞在制作招聘を受け、国内外の美術館で展示活動を行う。主な賞歴は、第33回Rakow Commission 2018(2019年、コーニングガラス美術館 / アメリカ)、富山ガラス大賞展2021大賞(2021年、富山市ガラス美術館)。ノルウェー国立美術館(ノルウェー)、金沢21世紀美術館、国立工芸館などに作品収蔵多数。近年の主な展示は「国際芸術祭あいち2025」、また個展「Subtle Intimacy : Here and There」(2023年、ポートランド日本庭園 / アメリカ)に参加。ニューヨークタイムズ紙などで作家特集掲載。現在は、石川県を拠点とする。



佐々木類 《Self-Container No.1》

横手太紀



1998年生まれ。神奈川県逗子市育ち。2021年東京藝術大学美術学部彫刻科卒業。2025年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。横手太紀の実践は、身の回りの景色や出来事によって揺さぶられる感情から始まる。存在と不在、非言語的なやりとり、目では捉えきれない微細な存在や事象。横手は物質とその背後にある見えない交感に目を向け、それらを丁寧な眼差しによって、集合体のなかに埋もれた個の存在や、多様な時間の流れを浮かび上がらせる。人間と非人間、現在と記憶、現実と想像が自然と同じ場に流れるなかで、そうした他者との静かな共鳴は、そのあわい※へ目を向ける態度であり、私たちと社会や世界とのより深い接続を促すものである。主な展覧会に、to make today lovely, too / to make today lonely, too (CON_+parcel、東京 2026)、Minor Attractions 2025 (The Mandrake Hotel、ロンドン 2025)、Frieze Seoul 2025 (COEX、ソウル 2025)、BOLMETEUS (SAI、東京 2024)、until soil unites (CON_、東京 2024)、六甲ミーツ・アート2023 beyond (六甲山、兵庫 2023)、even a worm will turn (parcel、東京 2022)、惑星ザムザ (小高製本工業跡地、東京 2022)など多数。

※あわい…物と物のあいだ。また、あいだの距離。



横手太紀 《Moku/ Floating Rubble (when the cat's away, the mice will play)》 Photo by Jungwoo Lee

■ディレクター

永山祐子



1975年東京生まれ。1998年～2002年 青木淳建築計画事務所勤務。2002年永山祐子建築設計設立。2020年～2024年、武蔵野美術大学客員教授。2023年～2025年、グッドデザイン賞審査副委員長。主な仕事に「LOUIS VUITTON 大丸京都店」、「丘のある家」、「豊島横尾館（美術館）」、「女神の森セントラルガーデン（小淵沢のホール・複合施設）」「ドバイ国際博覧会日本館」、「玉川高島屋S.C. 本館1Fグランパティオ」、「JINS PARK 前橋」、「膜屋根のいえ」、「東急歌舞伎町タワー」、大阪・関西万博「ウーマンズ パビリオン in collaboration with Cartier」、パナソニックグループパビリオン「ノモノの国」など。ロレアル賞奨励賞、JCDデザイン賞奨励賞（2005）、AR Awards 優秀賞（2006／「丘のある家」）、Architectural Record Design Vanguard（2012）、JIA新人賞（2014／「豊島横尾館」）、山梨県建築文化賞、JCDデザイン賞銀賞（2017）、東京建築賞優秀賞（2018／「女神の森セントラルガーデン」）、照明学会 照明デザイン賞 最優秀賞（2021／「玉川高島屋S.C. 本館1Fグランパティオ」）、World Architecture Festival 2022 Highly Commended（2022）、iF Design Award Winner（2023年「JINS PARK 前橋」および2026年「AOI CELESTIE COFFEE ROASTERY」）、第76回芸術選奨文部科学大臣新人賞（美術B部門）など受賞。現在、東京駅前常盤橋プロジェクト「TOKYO TORCH Torch Tower」などの計画が進行中。著書に『建築から物語を紡ぐ』（グラフィック社）、『建築というきっかけ』（集英社新書）がある。

■キュレトリアルコラボレーター

丹原健翔



作家、キュレーター。1992年東京生まれ。ハーバード大学美術史学科卒業。現代におけるコミュニティの通過儀礼や儀式についてパフォーマンスを中心にボストンで作家活動をしたのち、2017年に帰国、国内で作家・キュレーターとして活動。サイトスペシフィックな作品や展示を中心に、鑑賞者のまなざしの変化を誘発することを目的に制作。作家・キュレーション活動の他に、これまでにアートスペース「新大久保UGO」や一般社団法人オープン・アート・コンソーシアムの立ち上げを行う。その他に「ソノアイダ」プログラムディレクター、東京工芸大学非常勤講師など。主な展覧会にMeta Fair #01 (2022年、ソノアイダ#新有楽町、企画・運営・キュレーション)、「デバッグの情景」(2022年、ANB Tokyo、キュレーション)、「無人のアーク」(Study: 大阪関西国際芸術祭 2023、キュレーション)、「Back to Thread / 糸への回帰」(FUJI TEXTILE WEEK 2023、山梨)、「竹中工務店展：たてもののめがね まちめがね展 宇宙から虫まで、縮尺で考える建築の見方」(2025年、VS.、大阪)など。